

## [119]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1657840>

---

出版情報：語文研究. 119, 2015-06-06. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 《會員著書紹介》

柳沢昌紀・大久保順子・入口敦志・富田成美 編

### 『仮名草子集成』第五十二卷

本集成は、近世初期に興隆した仮名草子について、それらを網羅的に収録することを目的として、翻刻刊行したものである。本書の構成は以下の通り。(各収録作品の構成は割愛した)

例言

凡例

『仮名草子集成』で使用する漢字の字体について

新板 下り竹斎咄し (整版本、三卷三冊、絵入)

解題

露殿物語 (絵巻、三卷)

解題

田夫物語 (大本、一卷一冊、絵入)

解題

帝鑑図説 (整版本、十二卷六冊、絵入)

(巻九までを収録。第五十三巻につづく)

本書には、右の四作品が収められているが、ここではとりわけ、『新板 下り竹斎咄し』と『帝鑑図説』の二作品について

て説明を付す。

まずは『新板 下り竹斎咄し』について。本作品は、藪医師竹斎とその下僕にらみの介の滑稽な諸国行脚の旅、および珍療治の模様を描いた『竹斎』(別書名『竹斎物語』、『竹斎諸国物語』など)の改題・改装本である。

入口敦志氏は「解題」において、本底本の内題や丁付けなどから、『竹斎物語』(二冊本)↓『新板 下り竹斎咄し』(三冊本)↓『竹斎諸国物語』(四冊本)、という改題・改装の過程を推察されている。当時人気を博した『竹斎』ゆえ、その流布状況は多岐にわたるが、本作品はそうした一つ一つの関連諸本を、点から線へとつなぎ合わせる、重要な位置づけにあるものと言えよう。

次に『帝鑑図説』について。本作品は、中国の万曆帝(一五六三―一六二〇)に対する帝王学の書として編まれたもので、中国歴代帝王の事跡から、模範とすべきもの八十一話、訓戒とすべきもの三十六話、全百十七話を収め、一話ごとに一図ずつ付したものである。日本では狩野山楽が初めて模写し、また徳川家康や豊臣秀頼などによって出版されたことでも知られている。

本書所収の底本には、寛永四年版平仮名本が用いられているが、この版を出発点として、以後、数種の平仮名本が出版される。よって、平仮名本『帝鑑図説』の広がりを読む上で、本書は必見の書となること間違いないだろう。

なお、日本における『帝鑑図説』の模倣・受容の流れについては、入口敦志氏『武家権力と文学——柳宮連歌、『帝鑑図説』』（ぺりかん社、二〇一三年）に詳しい考察が備わる。併せて参照されたい。

（平成二十六年九月 東京堂出版 A5版 三〇八頁 一八、〇〇〇円＋税）

工藤重矩 著

## 『平安朝文学と儒教の文学観』

本書は、平安から近世までにおける、源氏物語などの和文学（和歌や物語等の仮名の文学）の注釈史・享受史と儒教的文学観との関連を通して、和文学を読むことの社会的効用を説き、最終的には儒教的教誡説と妥協せざるを得なかったこと、および詩経解釈を規範とした文学観の規制力の強さを確認したものである。

本書の構成は以下の通り。（各章の節題は割愛した）

序 平安朝の和文学と儒教の文学観

——本書の案内をかねて

第一章 和歌勅撰への道——古今集序の論理

第二章 詩経毛伝と物語学

——源氏物語螢巻の物語論と河海抄の思想

第三章 源氏物語螢巻の物語論義

——「そらごと」を「まこと」と言いなす論理の構造

第四章 紫式部日記の「日本紀をこそ読みたまへけれ」について

——本文改訂と日本紀を読むの解釈

第五章 源氏物語桐壺巻「いづれの御時にか」の注釈思想史

——儒教的文学観への対応をめぐる三つの流れ

第六章 源氏物語享受史における宋学受容の意義

——岷江入楚の大意における大全の引用を中心に

第七章 源氏物語享受史における寓言論の意義

——そらごと・准拠・よそへごと・寓言

第八章 大和物語と伊勢物語——事実と虚構の間で

第九章 本居宣長の矛盾

——「物のあはれを知る」の教誡的効用

初出一覧

あとがき

書名・人名索引

平安時代、古今和歌集にしても源氏物語にしても、和文学がその存在意義を主張しようとするれば、その障壁は常に儒教的文学観にあった。儒教的文学観とは、詩経観である。つまり、人格陶冶に始まって政治的・道徳的効用を有する点において価値があり、詩（詩経）を読むとは政治的・道徳的教訓

を読み取るといふことであつたのである。儒教的に見れば、政治的・道徳的に役に立たない文章に社会的価値はないに等しい。この儒教の文学観を平安時代前期の貴族知識層は大学で必須の知識として学んだ。そしてその後も、詩経を読む意義は人格陶冶にあり、為政者としての心構え・教訓を得るのにあるという詩経観が文学観の柱であり続けた。そして和歌を「艶辞」と称した大江千里の句題和歌序や、物語は「そらごと」であり女の気晴らしであるとする三宝絵詞の言い方にも、和歌や物語が儒教的価値観の埒外にあつたことは明白である。儒教的に見れば、政治的・道徳的に役に立たない文章に社会的価値はないに等しかつたのである。

理念としての儒教的文学観への対応は、和文学の研究を担う人々にとって避けることのできない、重大な課題であり続けた。それゆえ、和歌や物語の社会的有用性を主張しようとする者たちは、きわどい論理を操りながら、なんとか儒教的文学観と同調させ、あるいは仏教的価値に寄り添うなどして、その存在意義を主張していったのであつた。

本書はその和文学の側の対応の経緯、苦闘の跡を、儒教の文学観との関わりを通してたどろうとするものである。それはおのずから「文学は何の役にたつか」という問いに対する、我が国における思考の跡をたどることでもある。

(平成二十六年十月 笠間書院 A5版 三二二頁 六、五〇〇円＋税)

青木博史・小柳智一・高山善行 編

## 『日本語文法史研究2』

本書は、日本語文法の歴史的研究をテーマとする論文集の第二号である。本書の構成は以下の通り。

事象の形と上代語アスペクト 竹内史郎

「属性」と「統覚」とそのあいだ

——中間的複語尾の位置づけ—— 仁科 明

いわゆる「公尊敬」について 吉田永広

日本語疑問文の歴史変化——上代から中世—— 衣畑智秀

接続助詞「のに」の成立をめぐる 青木博史

動作を促す感動詞「ソレ／ソレソレ」の成立について

近世における副詞「どうも」の展開 深津周太

行為指示表現としての否定疑問形の歴史 川瀬 卓

近世における副詞「どうも」の展開

——上方・関西と江戸・東京の対照から—— 森 勇太

近世江戸語のハズダに関する一考察

——現代語との対照から—— 岡部嘉幸

「主観」という用語——文法変化の方向に関連して—— 小柳智一

【テーマ解説】アスペクト 福沢将樹

【テーマ解説】条件表現 矢島正浩

【文法史の名著】濱田敦・井手至・塚原鉄雄著『国語副詞の史

的研究』

西田隆政

菅虎雄先生顕彰会 編

日本語文法史研究文献目録二〇一―二二―二〇一三  
索引・執筆者紹介

『夏目漱石外伝』

菅虎雄先生生誕一五〇年記念文集』

各論文の時代やアプローチ方法は様々であり、多様な観点から記述されている。いずれの論文も、本書が掲げる「日本語文法史研究の最新の成果を発信する」という基本的目標のもとに執筆され、その気概を感じさせるものとなっている。

本書の構成は、創刊号である前号を継承する形で、研究論文に加え、「テーマ解説」と「書評」を載せ、巻末に「日本語文法史研究文献目録」を付している。創刊号の『日本語文法史研究』の刊行にあたってに、「継承性のない研究に新たな発展はない」と述べられているように、本書が継続して刊行されること、文法史研究の活性化や着実な成果となろう。

本書「はしがき」には、「毎号、若手研究者による論文数本を掲載し、活性化を図ることを目指している」ことが述べられている。日本語文法史研究の発展にとって、本書の果たす役割は大きいものであろう。

(平成二十六年十月 ひつじ書房 A5版 二八八頁 三、二〇〇円＋税)

菅虎雄（一八六四―一九四三）は漱石の親友として知られる人物である。帝国大学文科独逸文学科の第一回卒業生であり、第一高等学校のドイツ語教授を務めた。彼は禅宗に帰依しており、懊悩する漱石へ円覚寺釈宗演のもとでの参禅を紹介している。このほか漱石の就職を斡旋し、経済的にも援助してやるなど、両者の親交は並々ならぬ深いものであった。本書は菅と漱石の関わりを中心として述べた著述集である。本書の構成は以下の通り。（執筆者の肩書きは割愛した）

書「心」

有馬頼底

はじめに

原 武哲

芥川龍之介と二人の師――夏目漱石と菅虎雄――

海老井英次

菅虎雄と夏目漱石を繋ぐもの

西川盛雄

漱石の見た耳納連山

野口健司

練習魔としての菅虎雄・虎雄の晩年

菅 武雄

大伯父「菅虎雄」と戦前の「旧制高校」

小城左昌

漱石の初恋と菅虎雄

萩原雄一

書「潤身」

悠江軒東海大玄

臨濟宗妙心寺派 江南山 梅林禪寺

佐々木和生

菅虎雄研究のその後・菅虎雄研究調査資料文献

原 武哲

久留米版「続・明暗」

樋口明男

菅虎雄と漱石——祖父と父の縁

高木雅憲

視覚映像に浮かぶ「漱石周辺の交流風景」

三小田信夫

詩「梅林寺にて」

西川盛雄

「漱石句碑・菅虎雄先生顕彰碑」除幕式によせて

行徳直久

明善五十会の支援と恩師 原武哲先生

岩村 茂

「菅虎雄先生顕彰会」の歩み

田中正志

〔資料編〕

菅の研究は原武哲氏にまとまったものがあるが、旧一高関係者、また漱石研究者などごく限られた範囲においてのみ知られている人物であり、知名度は決して高くない。菅虎雄先生顕彰会は地元久留米でも知る人の少なくなってしまう菅の、生前の功績を後世へ伝えるために設立された。本書には菅虎雄研究調査資料文献や、菅虎雄年譜補遺も収録されており、研究資料としての有用性も兼ね備えている。

(二〇一四年十月 菅虎雄先生顕彰会 A5版 一九二頁 一、〇〇〇円＋税)

辛島正雄 著

## 『御津の浜松一言抄』

——『浜松中納言物語』を最終巻から読み解く——

本書は、『浜松中納言物語』について、最終巻の読解を深めることで、作品全体を理解してゆこうとしたものである。本書の構成は以下の通り。(各章の節題は割愛した)

序言

第一章 「むねいたきおもひ」考

——最終巻読解のためのキーワードを見定める——  
第二章 「むねいたきおもひ」の果て

——キーワードから最終巻を読み解く——  
第三章 交錯する「むねいたきおもひ」

——最終巻のキーワードから全編を読み解く——  
第四章 歌ことば「とこの浦」「にほの海」をめぐる

——首尾照応することばと「妹背」の物語——  
第五章 「おほよと」考

——巻一本文の再検討——  
第六章 「さかしげに、思惟仏道とぞあるかし」考・ほか四題

——中納言の人物像理解の一助として——  
第七章 「けぶりのさがのうればしさ」追考

——最終巻解釈の再検討——

第八章 「人かた」「人こと」「ひともし」考

——最終巻本文の再検討(二)——

第九章 「玉しゐのうち」に心をまどはすべかりける契り」考

——最終巻本文の再検討(二)——

補説 最終巻校訂・解説雑記

付録 大掴み『御津の浜松』

礎稿一覽

あとがき

索引

「御津の浜松」とは、『浜松中納言物語』の原題である。昭和初期に発見された『御津の浜松』最終巻の研究は、依然解釈の定まらない箇所も多い。著者は、現行の注釈書で「見む人(＝姫君を盗み出した男)」の思いであるとされていた「むねいたきおもひ」は、中納言の思いであると述べており、この物語は夢と転生に彩られた甘美な恋物語であるという従来の解釈から、中納言と式部卿宮の二人が一人の女性を奪い合うという「恋の闘争」の物語であるという見方も示している。本書では、これまで『御津の浜松』に対して抱かれてきた先入観に囚われず、表現の指し示すところからおのずと浮き上がってくる作品世界が、素直に捉え直されているといえよう。

(平成二十七年三月 九州大学出版会 A5版 二二八頁 三、六〇〇円＋税)

西丸妙子 著

『齋宮女御集と源氏物語』

本書の構成は以下の通り。

- 一 『齋宮女御集』伝本系統に関する考察
  - 二 『齋宮女御集』の成立年代について
  - 三 『齋宮女御集』への徽子本人の関わりかた
  - 四 齋宮女御徽子の周辺  
——後宮時代考察の手がかりとして——
  - 五 齋宮女御徽子の入内後の後宮の状況
  - 六 齋宮女御徽子の村上天皇への心情
  - 七 齋宮女御徽子ならびに娘の規子内親王の交友関係
  - 八 尚侍藤原登子について  
——齋宮女御徽子との関連において——
  - 九 齋宮女御徽子の義母登子への心情
  - 十 齋宮女御徽子の六条御息所への投影
  - 十一 『源氏物語』に引かれた『齋宮女御集』の歌
  - 十二 『源氏物語』六条院の史的背景
  - 十三 藤壺中宮への額田王の面影
  - 十四 『源氏物語』の夕顔と松浦地方
  - 十五 鬚黒北の方造型の意義
- あとがき

初出一覧

齋宮女御集語彙索引

各系統本の同一歌番号対照表

本書は、伊勢の齋宮であり、後に村上天皇女御であった齋子女王と、その歌集『齋宮女御集』についての詳細な考察を綴ったものである。齋子は娘の規子内親王が齋宮に任じられた際、娘とともに伊勢に下るといふ異例の行動をとった人物であり、源氏物語の登場人物、六条御息所のモデルとなったと言われている。

『齋宮女御集』はこれまで、その成立過程について確たる結論が見いだされなかった。本書は諸本やその構成、詞書などによって、成立過程や諸本系統の関係を明らかにすることを試みている。また、齋子の育った環境、家柄、交友関係、後宮の様相など、齋子本人を取り巻いていた世界を歌や資料によって読み解く。これらの後宮生活や皇妃たちの心情は歌の背景となるだけでなく、政治的動向や権力構造といった平安時代史を解き明かす一端ともなるであろう。『齋宮女御集』と源氏物語との関係においては、齋子とそのモデルとなった六条御息所母子のキャラクター形成だけでなく、実在の貴族邸宅と六条院との典拠関係、引歌といった観点から多角的に考察されている。さらに、藤壺が「紫のゆかり」と呼ばれるようになった所以、夕顔と松浦地方・神女性との関係性、鬚黒

の北の方に見いだせる文学的な意味といった源氏物語の諸事項についても考察している。

加えて、巻末には『齋宮女御集』の語彙索引、各系統本の歌番号対照表が付けられており、同集と源氏物語の研究に大きく貢献する一冊となるであろう。

(平成二十七年二月 青簡社 A5版 四三三頁 一三、〇〇〇円＋税)

川平敏文 著

### 『徒然草の十七世紀

#### ——近世文芸思潮の形成——

本書は、江戸時代に著された徒然草注釈書に軸足を置き、そこから派生、展開する諸問題について考察を加え、近世(特に十七世紀)における文芸思潮を論じたものである。

本書の構成は以下の通り。

はじめに——本書の立場

I 徒然草の位相——文芸と学問のあいだ

1 徒然草の「発見」——慶長文壇史の一齣

2 「つれづれ」の季節——十七世紀の時代思潮

3 徒然草をめぐる儒仏論争——中世的学知の再編



4 兼好発憤説の系譜——南北朝史観と述志の文学

5 誤読と精読——井村信成『徒然草隠解』論

II 「情」と「理」のゆくえ——和学史再考にむけて

1 林羅山『野槌』論——中世歌学への挑戦

2 高田宗賢『徒然草大全』論——教誡主義からの離脱

3 閑寿『徒然草集説』論——実証的学風の成立

III 徒然草を「読む」「聞く」——古典講釈と庶民教化

1 徒然草講釈の技法——元禄・享保期の指南書から

付論 『徒然種講筈要集』について

2 注釈と講釈——類版問題の余波

3 徒然草講釈の風景——『徒然草口義』を読む

IV 注釈者たちの肖像

1 伊藤栄治——『鉄槌』編者説

2 南部草寿——明儒の風貌

3 浅香久敬——元禄加賀藩士の生涯

4 閑 寿——青木鷺水にあらざること

V 徒然草の波紋

1 徒然草から江戸文学へ——古典の転生

2 徒然草の画像学——近世初期の扇面と屏風

3 徒然草と国学——松平定信『花月草紙』を読む

おわりに

初出一覧

あとがき

## 索引

中世に兼好法師によって書かれた徒然草の注釈書を端緒として、近世においてはその問題の波及するところは、古典を研究する和学者のみに留まらない。儒学者や歌人、僧侶、神道家といった当時の文芸の担い手に広く受容、注釈されることよって、徒然草注釈は近世文芸全体を考える上での鋭い突破口となり得る。著者が、徒然草注釈書が「さながら学界・文壇の縮図のような様相を呈している」とする所以である。

第Ⅲ部では、徒然草の受容に関して、「講釈」という現場の実態にも注目し、目で読むだけではなく、耳で聞く当時の古典受容の在り様を明らかにしている。

また第Ⅳ部では、注釈を施した人物に焦点が当てられ、それぞれの伝記的事項や思想についての考察がなされている。未だ文学史の表舞台に名の明るい者ばかりではないが、彼らの「肖像」がより克明になることで、近世文学史の新たな一面が見え、また別の新たな問題を提起してくれることは言うまでもない。

徒然草注釈の内包する問題がこれほど広範に渡っている実態は、徒然草が、江戸時代における代表的な古典であり、また「近世文学の母体の一つ」となっていることの証左でもあろう。十七世紀の文芸や思想、またそれを取り巻く諸問題を

研究対象とする者にとって必携の一冊である。

(平成二十七年二月 岩波書店 A5版 四五五頁 一、八〇〇円＋税)